

武装音楽祭

野阿 梓



著者略歴 昭和29年生，西南学院
大学文学部卒，作家 主著書「兇
天使」「銀河赤道祭」（以上早川
書房刊）他

HM=Ha

SF

JA=Japanese Fiction

NV=Novel

NF=Nonfiction

Jr=Junior

FT=Fantasy

YR=Young Romance

GB=Game Book

武装音楽祭

<JA195>

著者	野の阿あ 梓さあずさ	発行者	早川浩	印刷者	矢部富三	発行所	株式会社 早川書房	一九八四年十一月三十日 一九九〇年三月三十一日 三刷 発行 (定価はカバーに表 示してあります)
							東京都千代田区神田多町二ノ二 電話東京(二五)三一一一(大代表) 振替口座番号 東京六十四七九九 乱丁本・落丁本は本社またはお買求 めの書店にてお取替えいたします。	

印刷・三松堂印刷株式会社 製本・株式会社川島製本所
Printed and bound in Japan

ISBN4-15-030195-6 C0193

ハヤカワ文庫JA

〈JA195〉

武装音楽祭

野 阿 梓

早 川 書 房

1809

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

第一部 冬の城……………七

第二部 武装音楽祭……………二五

解説／川又千秋……………三五

武装音楽祭

A Portrait of the Terrorist
as a Young Man

第一部 冬の城

MASKED PARTY

ガラスの皮膚を通して、熱帯夜の体温が指先に伝わってくる。

レモンは、掌をひろげて押しつけた窓の向う側に、夏の宵闇と二重映しになった自分の仮装をみつめた。暗く染めた髪に金粉が光る。うすく化粧を刷き、アイラインを入れるだけで自分の性が全く不明なものになってしまうのは奇妙だ。

異星のヒエログラフを象った漆黒のパーティードレスにも金粉がまぶされ、スパンコールのように光っている。任務のために変装するのは始終のことだ。薄汚ない浮浪者にも美貌の令嬢にもなれた。しかし今夜の仮装はまったく馬鹿げていた。まるで高級娼婦のようだと彼は思った。

背後でドアが開いて、ブッチが顔をのぞかせた。レモンは暗い窓に映った友人のぼんやりした影に向って、振りかえらずに手をあげて合図した。

「レフ・デヴィ」とブッチはレモンの偽名を呼んだ。「用意はいいか。出番だぜ」

「判った、今いく」

レモンはため息をついて窓から手をはなした。振り向くと、もうブッチの姿はなく、半分開い

たドアから明るい光りと音楽がもれている。

レモン・トロツキーが正規の学生だったのはもう昔のことだった。母星の高等学校を放校になり、ついでに家からも追い出されて以来、彼が正式に在籍した学校はなかった。

銀河帝国打倒を叫ぶ政治的なグループと関わりがあったというような経歴では、どの学校も受け入れてくれるはずがない。

しかし彼のように若く知力にすぐれた青年にとって、学生であるということは、そうした秘密結社の成員のまたとない隠れみになるのだ。だからレモンは出自を、名前を、素姓を偽わり、学生になりすまし、スカラシップの交付を受け、表向きは平凡な生徒として生活した。今の帝都大学に入ったのは三ヶ月前だが、そのときすでにレモンは様々な思想および組織の遍歴を経て、狂茶党（マッド・ティー・パーティー）に入党していた。

もとより狂茶党は非合法な集団であり、黨員としてのレモンは地下生活者だったが、彼は少なくとも三つの顔と十以上の名前をもち、昼と夜に仮面を使いわけ、大学の内外で活動をつづけることができた。

だが仮面劇は観客を欺むくとどまらない。どんなに緻密な計算を立てても、いつかは演技者である当人も混乱にみちびくものだ。レモンの偽装の一つに、シンパ系の資金を得る窓口として学内演劇部の部員があった。

不幸なことに劇部自体の経済的運営は火の車で、彼らはいろいろなアルバイトを強いられていた。子供相手のアトラクションにぬいぐるみを被って七転八倒するなどという重労働から今夜の

ような高度の演技力を要求される仕事まで様々であった。

今夜の仕事——仮面舞踏会のヘルバーだが、これは最近、帝都トキオを中心に上流層に流行しているパーティの形式で、そこでは参会者の全員が別の誰かに扮するのである。

もちろん互いによく見知った相手と役割^レを交換するため、ごく限られた人々同志でしかこのパーティは主催することはできない。それがまた上流人種の自尊心をくすぐり、去年の秋頃からあちこちで開かれていた。数時間の間、別人になりすますことは彼らに舞台人しか知ることのなかった、あの奇妙に倒錯した愉悦を教えた。人々はこのゲームの虜になり、自分が次に演じるべき知人をふだんから異様な目付きで観察し、役^レづくりに励んだ。

ところで例えば五十人の参会するパーティで必ずしも五十組の人格交換が行なわれるわけではない。つねに、そこには実在しない人物を演じる者が現われる。そして人は、自分を演じている誰かを観ることを好んだ。このギャップを埋めるために、大学の演劇部員までが狩り出されて上流人種を演じるヘルバーという仕事のできたのだ。

事前のちょっとした学習と訓練だけでこの仕事は可能だったし、いい金にもなった。演技力の確かなヘルバーは引っぱりだこだった。レモンは職業的な必要から変装の研鑽おこたりなく、学生演劇のレビュールでは群を抜いた技倆で知られていたので頭数をそろえる時はよく呼ばれた。気はすすまなかったが、劇部の名客演として有名なへみなしゴブッチとは親友でもあり、今夜は断わりきれなかったのである。

真紅の照明がホールを平板に染めていた。

きらびやかな服装に身をつつんだ女たちが宝石の話をしている。レモンは、むせかえりような数十種の匂いの中に立って、自分が香水をつけていないことに気づく。

テロリストは残り香を嫌うものだ。

しかし彼が扮した女性性は悪どいほどの色と香りで自らを飾っているのだ。赤い視野の中でレモンは帝国の頽廃を観察する。

腐爛した巨大な果実。美しい内臓。他者の痛みと苦しみを感じない選良たち。打ち倒すべき鈍重さ。一言でいえば、敵。

「アプター産のそれは素晴らしい輝きをした——」「よい人だね」「愛しているわ」「そうとも」「そんなこと、何も判ってはいらっしゃらないわ」「悪魔の猫の目の石と呼ばれていますの」「あの方の台座は大きいけれど、それは石の瑕をかくすためのよ」「愛しているわ」「そうとも」

高価な服を着た男たちが自分自身と別な誰かのことを話している。ときには同じ人物が三、四人も顔を合わせて各々の仕事について話していることもある。いつもこの種のパーティーの後で、人格転移の後遺症をかかりつけの精神医に訴える人間がでるという。自分がいったい何者であったか判らなくなるのだ。

希薄な存在たち。虚偽の市。その中をレモンは美しい脚をひらめくように運んだ。とうに本名を捨て素顔を忘れた彼にとって、いつもの学生として仮面のパーティーに出ることは影に影を重ねるようなものだった。たとえその影が自分の敵勢力であっても。

出来の悪い不条理劇のようなパーティーは果しなく続くような気がした。

照明がショッキング・ブルーに切り換った。

レモンは、今まで雑談を交していた婦人の眼が玉虫色に輝くのを見て胸がわるくなった。シャンドリアがぎらぎらと光る。豪華な食事が一瞬にして蒼ざめた。あらゆる彫像と絵画が夕暮れにとける。レモンの、偽装がための倦怠は彼自身の本当の心まで蝕んでゆく。

「おや、レフ、ここにいたのか」

所在なくビュッフェをつまんでいたレモンの背後で、ブッチの快活な声がひびいた。振り向いて、グラスを合せる。

「ここでは俺はクレイヴ侯夫人だぜ」

「本当だ」と、某財閥の御曹子であるブッチが微笑っていった。「喋り方もそっくりだ」あたりには人の波が退いた。ブッチが、もとの演劇青年の顔にもどって、そっといった。

「ところでレフ、君にひき合いたい人間がいるんだ」

レモンの眼にチラと警戒の色が走った。

「ブッチ、俺をはめるつもりじゃないだろうな？」

相手は邪心のない笑顔をうかべて応えた。

「君を？ まさか。何も策らんでなんかないぜ。実はド・コートニイ事件のことを知っている人がいてね、是非、君に会いたいというんだ」

仮面舞踏会のヘルパー以外にも特定の人物を演じるという仕事はあって、レモンは一度だけやったことがある。巨大カルテルの会長が生命の危険を感じる局面にあり、その期間レモンが影武者をつとめたのだ。彼は襲撃を数回うけて、かすり傷ひとつ負わずにきり抜け、しかも最後には

犯人の男を逆に捕えてしまった。

「しかしあの話はごく一部の人間しか知らないはずだ」レモンは不審な表情でいった。

彼がカルテル会長の影武者をひきうけたのは、党の指令でもあったのだ。レモンは会長に扮した間にカルテルの頭脳から有益な情報をいくつも、盗み出していた。

「その人物はだから」とブッチが相かわらず明るい調子でいった。「ごく一部の限られた人間であるわけさ。さあ、来いよ」

照明は黄色に変わる。荒地の色彩だ。

砂岩を彫りぬいた洞穴のような小さい室を三つ、通った。

この邸は広い。どれほど宏大なのか判らない、とレモンは思った。迷宮のようなものだ。銀河帝国でも有数の武器商人ギルドであるギャラクサームの幹部が所有している館の一つだった。このような邸の中では様々な違法行為が行なわれると聞く。合法的容器の中の非合法。今は、レモンの存在自体がそれに当る。

ピロードの内張りのどこかを、先を歩くブッチの手が触れた。レモンは何者かの視線を感じた。黄褐色の壁が不意にかき消え、空間と音楽と人の笑い声があらわれた。

光学カーテンに仕切られたアルコーヴの中央に巨大な三日月形をしたソファを置き、ロベ・チャイルドハロルド卿は左右に美女数名を侍らせて遊興の最中である。

レモンは女の貌に唇を歪めて微笑した。彼は、ソファに沈むように坐った等身大の卵に向って右手を上げた。

「卿、あなたでしたか」

黄色い光りの中で卵に張りついた巨大な顔が笑った。裸にちかい恰好の女たちを撫でまわしていた両腕を大仰に振りあげてロス卿は怒鳴った。

「おお、我が魂の恋人が到来だ！ ようこそ、レフィー・デヴィー」そして女の一人を片手で軽軽とかつきあげ、席をあげた。「さあ、なにを突っ立っているんだ。こちらへ来たまえ、レフィー」

他の女たちは明らさまな敵意を浮べてレモンをにらんだ。この照明で何も知らなければ、レモンは第一級の美人で通用する。彼は苦笑してロス卿の前に歩いた。

新しいボトルの口が切られた。飲み干しては注がれ、彼が三杯目を唇からはなした時には、いつのまにかブッチと女たちは姿を消していた。レモンは卵の形をした男と二人きりで、外界と遮断された小室の中にいた。

「また会いましたね、卿。お変わりありませんか」

「なんとかしのいどるよ。再会を祝して」

二人はグラスを合せた。ロス・チャイルドハロルド卿とは二度目だった。レモンは、まだ狂茶党に入党する以前、彼の下で仕事をした事がある。その当時レモンはそれまで属していたセクトが特高警察によって壊滅し、自由で無頼な暮しを送っていた。そしてロス卿は若く、頭がきれ、腕の立つ人材を欲していた。彼は中央のギルドに属さない宇宙商人で、銀河南半球に独自の地歩を築きつつあった。レモンは経済スパイとして彼のために働らき、報酬をえたのだ。レモンの提供した情報、ロス卿が北半球、とくに帝都周辺に商圏を拡げるのに有効だったはずである。

レモンは、にこやかに微笑みながら、状況をすばやく測った。ロス卿は彼が入党したことを知